SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2014

7.19(SAT)-27(SUN) SKIP CITY INTERNATIONAL D-Cinema FESTIVAL 2014

長編コンペティション部門『友達』

遠藤 幹大監督 インタビュー

――『友達』は、東京藝術大学大学院映像研究科の修士作品になります。どのようなことを考えながら臨んだのでしょう？

©東京藝術大学大学院映像研究科

実は、僕が"劇映画"に取り組み始めたのは東京藝術大学大学院に入ってからのこと。映画制作自体は京都造形大学に進学してから始めたのですが、その時は実験映画、所謂個人映画で、まず最初に"スタッフやキャストありき"といった形の表現ではありませんでした。その後、劇作家・演出家の松田正隆さんが主宰する演劇カンパニー「マレビトの会」に参加するのですが、ここで担当したのも映像。大学院に入るまで脚本を書く、そしてそれを撮るといった経験は殆どありませんでした。なのでそういった経緯も含め、大学院の2年間で自分が"劇映画"として積み重ねてきたや試みてきたことの集大成を、まずは修士作品に集約させたい気持ちがありました。

――その中で脚本はどのようなアイデアから生まれたのでしょう？物語は、一向に日の目を見ない役者の島田が主人公。客が希望する人物を演じてひとときを共有する疑似体験サービスともいうべき仕事を始めた彼が、そこでちょっと危うい行為を計画する女子高生と出会い、予測もしない事態に巻き込まれていく。この特殊なお仕事の設定をはじめ、オリジナリティのある脚本だと思いました。

描かれる架空の会社の設定や、主人公の位置づけなどは企画の出発点としてありました。アイデア自体は舞台の活動の中で見聞きした事をベースに、自分なりにアレンジした形になってます。俳優、演技って事もそうですし、本番が終わり、家に帰っていき、次の日また本番を迎える。そういった事も含めたフレームで俳優という存在を捉えたいという事からこのアイデアが生まれました。

――それが共同脚本になったのは？

もともと一人で書く事に拘りが無く、複数の視点があった方がアイデア自体もジャンプするだろうと思っていたので、芸大の先輩である岡田寛司さんに参加して頂きました。以前に岡田さんが書いた脚本を読んだ事があって、その脚本が面白かったのと、魅力的な台詞、会話を書ける方だなという事で是非お願いしますと。

――タイトルはシンプルすぎる気がしましたが、作品を見るとまさにこれ以外にない。英語タイトルの"FRIENDSHIP"とともによくこの作品世界を表しています。タイトルに込めたことがあると思うのですが？

人と人がどう友達関係を築き、友情を育むのかといったことを描くのではなく、“友情”であり“友達”そのものについて考えてみたいと思いました。人と人の関係性を通して、友情や友達を語るのではなく、逆で“友情”や“友達”の意味することや世間一般にあるイメージを通して、人と人の関係性を描くというか。そういう視点で描くことで、また違った“友達”や“友情”の有り様が見えてくるのではないかと思いました。

――そういわれると納得で、この作品が提示する“友情”であり“友達”は、世間一般のイメージにどこかある“大切なもの”“良いもの”といったポジティブなものとはちょっと違いますね。

当人は友達と思っていたのに相手はそう思っていなかったり、友人だからこそ話せないことがあったり、時に“友情”や“友達”が自分の足かせになったりする。そういう“友情”や“友達”の異なった視点を提示したかったところがあったのは確かです。

――また、売れない俳優を主人公にしているところ、彼が日の目を見る舞台といった点から、“演技”もひとつのテーマになっている。答えにくいかもしれませんが、遠藤監督にとっていい俳優とはどんな役者でしょう？

©東京藝術大学大学院映像研究科

確かにその質問は答えづらい（苦笑）。僕は監督としてそれほど経験があるわけでもないのでそんなに立派な事は言えませんが、今回、山本（剛史）さんとご一緒させて頂いて思ったのは、俳優についての映画というのもあってか、現場中、カメラが回っている時とそうでない時のギャップが、限りなく少ない身体の状態にあったのかなと思いました。そういった特殊な状況の中で、演技の善し悪し。カメラが回っている、いないに関係なく、その場にきちんと存在してくれている。この事は自分が演技という事を考える上でひとつ重要な事なのだなと思いました。

――どういった経緯で山本剛史さんに依頼したのでしょう？

まずプロデューサーから山本さんの名前が出たんです。で、共同脚本の岡田さんにもこっそり誰かイメージしている人はいますかと聞いたら、山本さんだと。正直なことを言うと、僕は会うまでイメージを掴みきれていませんでした。しかし、実際お会いしてお話させて頂いたら、魅了されてしまい、プロデューサーと岡田さんの目の確かさを痛感しました（笑）。

――では、プロフィール的なところで、そもそもの映画の原体験を教えてください。

三重県出身なのですが、家は映画館まで 15 キロぐらい離れているようなところで。気軽に劇場にいけて、映画を観るといった環境にはありませんでした。興味を持つきっかけになったのはテレビでの映画体験です。中高校生のちょうど思春期を迎えたぐらいのとき、深夜のテレビに映画枠があって、いま考えるとかなりディープなラインナップの作品が放送されていました。その時に塩田明彦監督の『月光の囁き』見て驚いた覚えがあります。

――高校生の男女が歪んだ愛の物語。中高生にはちょっと刺激が強すぎる作品だったのではないでしょうか（笑）。

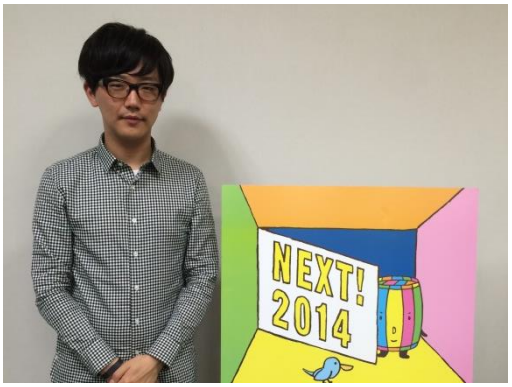
ええ。でも、刺激というより、当時は何せまだ子供だったのでよくわからなかったですね（苦笑）。ほかにもタイトルを忘れ

たのですが、同性愛を描いた外国映画とか、深夜の暗がりで親に気づかれないように見ながら、“なんだこれは？”と（笑）。テレビで見ているんですけど、ふだん放送されているテレビドラマとは明らかに違う。それまで、スピルバーグ作品とかは見ていましたけど、そういった映画とも違う。普段は見られない世界を見せてくれるというか。そういう映画が世の中に存在していることが衝撃で。そこから特別“映画”というものを意識するようになりました。

――それから映画をよく見るようになった。

そうですね。近くのレンタルショップに通うようになって。大学以降は、先ほど語ったとおりです。こう振り返ると、当初から劇映画に惹かれていた気がするのですが、なんだかとても迂回しているような気になってきました（笑）。でも、演劇での体験がなければ『友達』の着想を得る事はなかったのだろうし、そういった意味では、これまでの様々な体験が、この『友達』という作品に強く反映されているのだなと思っています。

（取材･文　水上賢治）



監督：遠藤幹大

1985 年生まれ、三重県出身。京都造形芸術大学在学中から自主制作映画の製作を。卒業後、演劇カンパニー「マレビトの会」（代表：松田正隆）の活動への参加を経て、東京藝術大学大学院映像研究科に入学。黒沢清に師事。主な監督作品に『to/for』（08）『エルドラド』（12）、『ビフォーアフター』（13）がある。

長編コンペティション部門『友達』　<2013 年／日本／75 分>

■上映　7.21（月・祝）10：30　SKIP シティ映像ホール
　　7.24（木）14：30　SKIP シティ多目的ホール

<STORY>

売れない俳優が手に入れたのは、孤独な人々のために“友達”を演じる役だった…。

俳優の島田は、一向に芽が出ない。ある日、先輩の福地に紹介されたオーディションに向かうが、そこは客の希望通りの人物を俳優が演じる会社だった。客の女子高生ミオは、島田をテロの計画に巻き込んでいく。

監督：遠藤幹大

出演：山本剛史、松本花奈、大庭裕介